

## ワークライフバランスを可能にするもの

稲葉 昭英

私は31歳で子どもをもったが、家庭の事情もあって育児と家事のほぼすべてを担当した。研究者の世界では30代、40代に仕事をするのが求められるから、私にとって育児や家事はなるべく短時間で済ませたいものだった。けれどもどんなに簡略化・外部化しても育児や家事はかなりの時間とエネルギーを要し、特別な才能があるわけでもない私はこの時期にさっぱり研究ができなかった。一方でそうした私に育てられた子どもにとって、この環境が幸福だったのかといえば、そうではなかったようだ。正直に言えば、もっと一緒にいてあげればよかったな、と今は思う。

アメリカの社会学者 A. ホックシールドが著書『タイム・バインド』（坂口ほか訳、2012年、明石書店）の中で扱ったのはこうした問題である。彼女はアメリカでもっともワークライフバランスに取り組む企業を対象に、ワークライフバランスを促進する制度がなぜあまり社員に利用されないのかを調査した。結論からすれば、とくに学歴が高くキャリア志向の社員たちは、仕事により多くの時間を投入することを望んでいた。自尊心や達成感を与えてくれる仕事は高い価値をもち、職場が自分のいるべき場所（ホーム）になる一方で、思い通りにならない育児はできればやりたくない「仕事」になっていた。いわゆる「仕事の家庭化」「育児の仕事化」である。育児は可能なら外部化し、なるべく短時間で、合理的に処理すべき対象となっていた。そうであれば、育児時間の確保を目的とした制度が利用されないのはもっともである。

ワークライフバランス施策の充実を図ることは大事だが、育児や家事の価値が低下し、仕事の価値が高まるほど、育児や家事は義務感によって行われる「仕事」になっていく。それが子どもや親子関係にとって何をもたらすのかはまだわからないが、バランスをとることは難しくなる。ワークライフバランス実現の最大の難問は、実はここにあるのだと思う。



### PROFILE

いなばあきひで：慶應義塾大学文学部教授。東京都立大学人文学部助教授、首都大学東京人文科学研究科教授を経て2014年より現職。本財団理事。専門は家族社会学、社会統計学。計量的なモデルを用いて、ジェンダーや貧困、離婚の影響などの分析を行っているほか、東京都港区、神奈川県相模原市などの男女共同参画事業にも委員として関与。編著書に『現代家族の構造と変容』（東京大学出版会、2004）、『社会福祉研究法』（有斐閣、2006）など。